

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可  
(毎月一回・十五日発行)

(通第八十八号)

# 慈

# 光

第八卷

第七號

## 目

日本源空聖人真影の銘文

(1)

警策を身に受けて

花田正夫(2)

病氣の見舞文

白杵祖山(6)

東方偈に就いて

福島政雄(7)

求道いろは歌

西村武三(12)

## 次

# 日本源空聖人眞影の銘文

建曆壬申三月一日

四明山

樺律師

劉官讚

普勸道俗念弥陀仏

能念皆見化仏菩薩

明知称名往生要術

宜哉源空慕道化物

信珠在心心照迷境

疑雲永晴仏光円頂

普勸道俗念弥陀仏といふは、普勸はあまねくすゝむと也。道俗は道にふたりあり、俗にふたりあり。道のふたりは、一には僧、二には比丘尼なり。俗にふたりは、一には仏法を信じ行ずる男也。二つには仏法を信じ行ずる女なり。念弥陀仏とまふすは、尊号を称念する也。

能念皆見化仏菩薩とまふすは、能念はよく名号を念ずと也。よく念ずるとまふすは、ふかく信ずる也。皆見といふは、化仏菩薩をみむとおもふ人はみなみたまてまつる也。化仏菩薩とまふすは、弥陀の化仏、觀音勢至等の聖衆なり。

明知称名とまふすは、あきらかにしりぬ、仏のみなをとなふれば往生すといふことを要術とすといふ。往生の要には如来のみなをとなふるにすぎたることはなしと也。

親鸞聖人述

源空聖人眞影の銘文

## 警策を身に受けて

花田正夫

時は明治三十五年夏、所は本郷の東片町の浩々洞の一室であります。同人の暁鳥、多田、佐々木の諸師は夏休みで夫々帰省。浩々洞は閑古鳥の鳴く寂けさであつた。唯一人安藤州一師が、病氣と貧乏のため帰省する旅費さへもなく、やむなく留守役をして居られました。そのことを、  
「実は私も二十七八歳の頃肺炎カタルに罹り、死生と功名との問題には相当なやまされました。この病がいよ／＼癒らず、これで死ぬるのかと思へば、誠に残念で堪へられぬ。折角志を立てて此処まで漕ぎつけたのに、今から病氣に罹つては、十余年来の学問苦心も水泡に帰するかと、深夜ひそかに暗涙を呑むことがありました。誰かの歌に「為すこともなくてこのまゝ死ぬるか病める我が友、男泣きに泣きぬ」といふのがあり、同感同感しました。  
とう／＼心中の苦悶を打明けて、清沢先生の教へを乞ひました。此時、先生が、其方の苦悶は結局約めて言へば、

「死ぬる事が嫌ひだ」といふ事になる。それ故、ソクラテスが「真の哲学者は死の問題を研究すべきもの也」と言ふのであると聞かされました。……  
更に先生は「死生の超脱は仲々困難、安心立命は真にむづかしい」と申されました。私はこのむづかしいの一語を頼るなつかしく思ひました。今まで信仰が定まらぬとて決して恥ではない、真の求道はこれからであると思ひ定めました……  
と安藤師は述べて居られますが、省みますれば、先生は三十六年には亡くなられたので、三十五年の夏と云へば、先生自身が痼疾すでに悪化し、死の壁に直面して萬事を処理してゐられた年であります。そこに安藤師の肺腑を衝く実語が、死に直面され、死を自覚せられて歩まれてゐた先生の心底から流れ出たのも、まことに由あるかなと感佩され、警策を無言のうちに蒙るのであります。

三蔵流支、淨教を授けしかば  
仙經を焚燒して樂邦に歸したまひき。

となつて居ります。

この「燒きすてる」とか「焚燒す」といふ文字を通してはげしい警策を我身にうけるのであります。さてひそかに、大地につばきして、大鉄鎚を下される流支三蔵の悲心を推測しますのに、

『曇鸞は仏法の大器である。そして五十年学び行じて来たのに、チットモ仏法がひらけてゐない。といふのも健康になつて八十年、九十年の長寿を得れば、仏法の玄意を獲られると思つてゐる。それが根本からの迷ひであり自力我慢の姿である。地上であれ、屋上であれ、はた山上であれ、如何程長い棒を振つても、天上の星や月を落すことは出来ない。そのやうに、生命さへあれば、広く学問し、真劍に修行さへすれば、仏法の究極に到達出来ると考へて、我身をかへりみないところに病根の深いものがある、そこを何とかしてでもゆりさまし、知らせてやりたい。』  
かうした三蔵の切なる一念が火と燃えて大爆發し、大鉄鎚が下つたのであります。やがてまたその迷妄を救済し、さうがために弥陀仏の本願が建立され、その迷妄者を迎へむがための淨土のましますことを、淨土の經典を渡して知らしめ給うたのであります。

さて私は清沢先生と安藤州一師との問題をとほして、曇鸞大師と菩提流支三蔵との信的交流を想ふのであります。淨土教の第三の高僧、曇鸞大師は、若冠十五で仏門に入られ、四論の研究と講讀に五十歳頃まで過されたけれど、心に満足といふことがなく、大部な大集經の誦破を思ひ立たれたのであります。

ところが大病にかかれ、幸に恢復せられましたが、そこで大師は「先づ健康を」といふので遙かに楊子江を渡つて仙人を訪ひ、仙術を学び仙經を得られて、嬉々として帰山せられました。

其頃、菩提流支三蔵が印度から支那に來られて仏典を訳して居られました。大師は或日、三蔵を訪ひ、仙術による長寿の法を得々として説かれたのでせう、すると三蔵法師は大地につばきして、大師を強く警策せられたのち淨土の經典、淨土論か、觀經を授け玉うたと伝へられます。

本師曇鸞和尚は 菩提流支のをしへにて

仙經ながく燒きすてて 淨土に深く歸せしめき

と祖聖は和讃でたたへて居られます。正信偈には

本師曇鸞は梁の天子

常に鸞の処に向ひて菩薩と礼したまへり。

その後、大師はひたすら淨土の念仏門に歸られ、聖道の路は力及ばずと捨てられたのであります。有名な大師の碑文にも

『吾すでに凡夫なり。智慧、淺短なり、未だ地位(菩薩の位也)に入らざれば、念力ひとしく及ばれず。草を置き、牛を引き、恒に心を槽檻に繋がしむべし。豈縱放にしては全く歸するところは得るに由なし云々』

と未代までも、我すでに凡夫、智慧、淺短なり、と我が御身にひきかけての懺悔の聲が伝へられてあります。

是処に、生老病死の四つの暴流を横ざまに超断する他力横超の直道が初めて支那に建現したのであります。

即ち大師が五十になられて大病され、それから、更に幾十年かの生命の保証さへあれば仏法の底を究め其宝を得られようといふ世間一般の考が根こそぎくつがへされ、打ち砕かれたのであります。そしていかに長い棒をもつてしても、またいくら高い山に登つても、星や月には金輪際とどかないといふこと、即ち、努めてさへ居れば、何時かは仏陀の絶対の境界に到達出来ようと考へてゐたことの愚昧さ。生命の長短、努力の如何、修行の厚薄、さういふこと一切が何等役立たぬと知らされて、問題の核心は自分自身にあつた、自己の迷妄にあつた、無力にあつたと底のない暗黒に崩折られたところに、仏陀の大悲、他力横超の

無碍光が射しそめられたのであります。

一つあることは二つある。二つあることは三つある、と昔から申しますが、支那五台山にひらけた他力真実の光明は、やがて道綽禪師の胸に伝承せられたのであります。

禪師は曇鸞大師示寂後二十一年目に誕生され、初めは涅槃宗に入られて、涅槃經を二十四回も講説せられたのであります。御自身の道は未だ尽くされず、遂には支那全土を遊歴せられて要津を問はれましたが遂に得るところなく、平素から敬慕されてゐた、曇鸞大師の墓参を思ひ立たれたのであります。

香華を手向け、誦經し、合掌礼拜される禪師の目に、前述の大師の碑文が写りました。読み行かれる禪師の両眼は涙にぬれ、思はずひれ伏されて

『相去ること千里、懸殊(すぐれておほいなるひと)なほ涅槃の講説を捨て、淨土の業を修し、すでに往生せられたり。いはんや我の如きは小子にして、所知所解何ぞ多とするに足らんや……』

と述懐され、聖道自力門は未代悪世の今の時、さとのこととは不可能で、全く高嶺の月で手が及ばない。それにひきかへ淨土の一門こそは吾等に相應の道である、と生涯を通じてお勧めになつた。然も御自身は『五鬘面牆』と名告ら

れ、目に五つのほこりが覆うてすつかり視力を失つてゐて、壁に顔をぶつゝけた如く、どうすることも出来ない身であると思悔して居られます。そこに自利他円満の徳号を一筋にお勧め下さつた所以があるのであります。

元照律師も五十頃に大病せられ『自省』と題された詩を次のやうに詠じて居られます。

教を聴き、禪に参じ、外を遡うて尋つね  
未だ曾て首を回してひとたびも沈吟せず  
眼光まさに落ちなんとして、前程暗し  
初めて識る、平生の用心の錯れるを。

『自分自身の駄目さに気づかないで、あゝでもない、かうでもない、外界にのみ眼をつけて尋ね廻つたが、何といふ愚鈍さであつたであらうか。いよゝ大病して死の淵に彷徨して見れば、行くべきは真暗である。噫、この五十年の生涯かけての求道は、すつかり間違つて居りました。』と落ち魂に気づかれて、ひたすら慈光を仰ぎ始められたのが律師の五十の頃でありました。かくて律師の自序伝にも「性を稟くる庸薄、行を為すに

## 白杵老師の見舞文

南無阿弥陀仏

御病氣はお苦しからんも、この苦しみの中にこそ、大悲大悲の御親はましますのである。

それがただおはしますといふばかりでなく、あなたの御病氣と一緒に同化して御親も御苦しみになりましたのであります。

御親のこの御苦惱は、ただあなたの御病氣と同じくお苦しき遊すばかりでない。またあなたの今の此の苦惱と、及びあなたの未来永遠の苦惱に同情同化したまふは、あなたの今の此の病苦にくらぶれば、百千萬倍の苦惱をお受け遊ばしてましますのであります。

されば病めるあなたは、病めることに依りて、御親の救ひを蒙り、悩めるあなたは、悩めることに依りて、御親の救ひを蒙り居るのであります。

病癒へて、身健かになりて後に、また苦を忘れて心楽しなくなりて後に、ここに始めて救ひを蒙るのではありませんせん。

この病める身にこそ、南無阿弥陀仏はみちみたされこの悩める心にこそ、南無阿弥陀仏はみちみたされてあります

不肖」と告白され、「嬰兒が母を離れ得られない如く、羽弱の小鳥が枝を伝ふ如く」ひたすら浄土教に帰入せられて、自行化他、同じく念仏を修められて、六十九歳を寿を完うせられました。

完

## 法語断片

娑婆腹で信を求めるのは繫いた舟を漕ぐやうなもので、それは徒らな求法である。

機ありて法を求む。法によりて機現はる。機現れて法に帰す。

—— 惠空講師 ——

南無といふ至心の鳥がとんできて、婆の胸に栖くらうて、ため／＼と呼ぶ声の聞えておくれた一念が、我を忘れて南無阿弥陀仏。

—— 北陸老婆 ——

時々叫び出さるる、ア、苦しい、といふ声の中に、また独りひそかにもだえ煩ふ思ひの中にこそ、大悲大悲はみちみちたまへることなれば、どこがどこまでも、御慈悲ならざるはありませぬ。

されば、ア、苦しいの叫びも、また独り思ひ出の悩みも、決して／＼あなたの声、あなたの思ひ出ではない。皆これお慈悲の声、お慈悲の願れであります。

かくも一毛、一米のへだてなき御慈悲の同化、同情にあづかりたる幸福を思念すべきことであります。

身も南無阿弥陀仏なり

心も南無阿弥陀仏なり

寝むるも、寝るも南無阿弥陀仏なり

湯業臥具も、南無阿弥陀仏なり

一切の事々物々の一々みな南無阿弥陀仏なり。

二月十九日

白杵祖山

東方偈に就いて (二)

福島政雄

彼の厳淨の土の微妙難思議なるを見て  
因りて無上心を發し 我が国も亦然らんと願ず。  
時に応じて無量尊 容を動かし欣笑をおこし  
口より無數の光を出して 徧く十方国を照らす  
光を廻して身を圍繞し 三印して頂より入る  
一切天人衆踊躍してみな歡喜す。

大士觀世音 服をととのへ稽首して問ひ  
仏にまをさく 何によりて笑みたまへる  
唯然なり 願くば意を説きたまへ。

梵声なほし雷震のごとし 八音妙響を暢ふ  
まさに菩薩の記を授くべし  
今説かんなんち諦かに聴け。  
十方より來れる正士 吾悉く彼の願を知れり  
嚴淨の士を志求し 受決して當に作仏すべし

一切の法はなほし夢・幻・響の如しと覺了すれども

諸の妙願を満足して 必ず是の如きの刹を成ぜん  
法は電影の如しと知れども 菩薩の道を究竟し  
諸の功德の本を具し 受決して當に作仏すべし

「彼の嚴淨の土の微妙難思議なるを見て」、その菩薩達が今の阿彌陀仏のお淨土を見られると、何とも云へない微妙、そして我々の心でとても思ひはかる事の出来ないお淨土であると。これは上の卷の淨土の莊嚴といふところで私の心持ちだけは申し上げましたのであります。さう今菩薩達は申されます。その菩薩達も無上心を起されるのであります。ところが前に私かういふ事を申しましたでせう。一体御經の中に出てくる何々菩薩だ、文殊菩薩だ、普賢菩薩だ、勢至菩薩、觀音菩薩、この菩薩達といふものは何者かといふことを前に一寸申しました。それは私、臼杵先生から伺つた事なのであります成程と思つたことなのであります。それはあの御經の上に並べられてある菩薩方といふものは實在の人間ぢやない、實在の人間ぢやないが仏

の慈悲や智慧が様々の閃きとなつて私共に届いて下さる、それは種々の無量の閃きがある。慈悲と智慧と云へばたつた二つのやうであるが、それがこの私共の命に閃いて来る、その時には実に種々無量の道、種々無量の姿を持つて仏の慈悲と智慧とが私共に通つて下さるのである。その無量の姿であります。仏の御心が私共に響いて来る筋道となるところの種々無量の姿と云ふものを、あゝいふ菩薩といふ事ではされたのであると。だから色々様々の仏の御命の閃きといふものを何々菩薩といふ言葉ではされたものであるといいたしますと、今こゝの処であります。こゝの処が私共にどう響くかといふ事になりまして、つまり菩薩達といふ仏様の命の様々の閃きの内に私共がかういふことを感ぜしめられる。つまり菩薩方のお姿の上に今直に私共に様々の道から閃いて来るところの仏の命といふものを、かういふお言葉の内に感ぜしめられる、それが菩薩方を通して始めて私共にひた／＼と感ぜられて来る、といふ味ひになりますかと思ふのであります。そしてさうなりますと、私共がつまりその広大なる世界の中に座を何処かに頂いてある、座を占めてゐると云ふやうな事になるのであります。

そこでその次になります。さうすると無量尊はどうなさるか申しますと「容を動して欣笑を發し」、この欣笑といふ言葉であります。これを文字の上から申しますと、

よろこびの笑ひであります。お顔が動いてよろこびの笑ひをなさる、私共で云ふならつまり笑ふと云ふところでありますが、たゞニツコリ笑ふといふだけでは仏様の欣笑といふ味ひがまだ出ないであります。これについて私の事でも前にも申し上げた事があるかも知れませんが、もう二十何年も前広島にをりました頃ある方から「どうも福島君の笑ひを見てをると淋しい笑ひをしよる、人間がそんな淋しい笑ひをしよる間は駄目だ」と、ところがその頃広島西晋一郎先生といふ方は立派な方で倫理学者で「西先生の笑ひを見るがいゝ、いかにもいゝ笑ひぢやないか、あんな風にならなかつて来ない」と人間といふものが出来たとは云へない。まだ福島君は駄目だ」とえらくきめつけられたものであります。それから二十何年たつてをりますが私思ひますのに、自分の笑ふのを鏡に写して見た事はありませぬけれどもとも／＼今尙淋しい笑ひをしてゐるらしい。なかなか本物にならないといふところであります。そんな風でありますから、仏陀の欣笑、これは御承知の通り觀無量壽經に韋提希夫人が散々愚痴を並べる、すると釈尊が微笑し給ふといふところが出て居ります。あんなところを見ましてもさういふ事を感ずるのであります。兎に角仏陀の欣笑、仏陀の微笑といふやうなところは、私共として自分の笑ひませんが自分全体がさういふ笑ひ方が出来ませうやうなところ

ろ迄めざして行くと云ふ、これは理想の境地、笑ひといふ方面から見ました理想の境地でありませう。さういふ欣笑をして口から種々の光が出て、そして十方国をあまねく照し給ふ。そしてその光が又ずうつと帰つて来て無量寿仏のお体を三度廻つて無量寿仏のおつむりの頂天からその光がはいつて行く、一体これは何事だらう。これ又考へて見るのであります。ところが光といへば何時も慈悲と智慧と云ふ。中でも智慧であります。さうするとその仏陀のお口から無数の光が出て来たといふのは、またかうといふ事、あとで仰言るやうな事を仏陀が仰せられない前に、何と云ひますか、仏陀の智慧といふものが衆生に響くと申しますか、うつると申しますか、衆生にうつすと申しますか、あの光顔巍巍の所で申しましたあの仏陀のお姿を私共が仰いだばかりで、その仏陀の智慧が私共にさつと通つて来て、またものを仰言らぬ前から何か私共にも会得されるものがあるといふ事なのでありませうか。それが口より無数の光を出して十方国土をあまねく照し給ふ、さうしてその光が又仏陀のお体を三度グル〜と廻つて頂より入るのでありますから、つまり仏陀の智慧を以て衆生をずうつと見通されてそして仏陀の頭、仏陀のお心に衆生の姿といふものがちやんと会得される、その仏陀の渾身智慧といふやうなところが仏陀の御体を廻る事三三三といふところに現されてゐるのでありませう。だからつまり仏陀の智慧のお働きが我

と云ふのは悉しく私調べて居りませんが仏陀の御声が色々の響き方をする、そこを云ふのでありませう。何とも云へない妙なる響きをそこに出来る。そこで菩薩に記を授けようと思ふ、つまり菩薩達に汝等は将来に於いて必ず仏陀の覚りを聞いて仏陀の世界を国土を建立するのであるといふその心証と申しますか、さういふ心の証りを与へようと思ふ。記を授ける、授記といふ言葉はお経の中で始終出て来る言葉でありまして、記を授けると云ふのは屹度さうなれるといふ確信を与へる。心証、心に証しを与へよう。諸々の菩薩に授記なさると云ふ事は、つまりその諸々の菩薩の諸々の閃きを通して私共が今この記を受ける、仏陀がさう云ふ心の証しをお授けになる、その御心持ちを菩薩達を通して私共今受ける、それを今説き聴かせるから諦らかに聴けよ。この諦聴の諦、これは前にも申しましたでせうがあきらかかにと云ふので隅の隅まで通つて自分の命の姿があきらかになる、さういふ聴き方をせよと云ふお言葉でありませう。で「十方より来れる正士、吾悉く彼の願を知れり」、十方から来れる菩薩達、その菩薩達の願がどう云ふ願であるかといふ事は自分は皆わかかつてゐる。それで厳淨土、おごそかな淨土を志し乞ひ願ひ求めて、そして必ず仏の覚りを聞く様になるだらう、かういふ風に先づ仏陀は仰せられてそれから覚りの内容になります。その次が「覚了一切法」、こゝは私なんかの御講義出来

我衆生に通つて来て、それで渾身智慧といふやうな仏陀、そのお考への中に一切の衆生がずつとはいつて、衆生の一切を、一人々々を御理解になるとも云ふ様な姿であります。それをかういふ云い現し方をしてあるのであらうと思ひます。私かねてはこの東方偈をうっかり読んでゐるのでありますけれども、この度皆さんにお話し申し上げるといふのでよく考へ〜読んでみますと、さう云う事が私の心に浮んでまゐりますのであります。これは仏陀のお声以前の仏陀の智慧の光の働きてあります。

それで「一切天人衆踊躍して皆歡喜す」といふ事になる。躍り上つて皆が喜ぶ、仏陀の智慧に照り通されて皆何とも云へない気持ちになるのであります。その気持ちを代表して觀世音菩薩がこれから云はれる。大士觀世音がその服を整へて仏陀にお礼を申し上げておたづね申し上げられる。仏陀はどう云ふ事でお笑ひになつたのでありませう。何とも云へない仏陀の欣笑のお姿が私共の心に通つて来て皆が何かうれしくてたまらぬ心持になつて居りますがどう云ふものでありませうか。唯然り願くは意を説き給へ〜さうでございませう。どうぞその心持をお説き下さいませんか。さうすると今度は仏陀の御声が「梵声雷震の如く」、梵と云ふ言葉は清い少しも汚れに染まない清い仏陀のお声が雷の如く聞えて来る。そして「八音妙響を暢ふ」この八音

るところぢやありませんが「一切の法は猶夢・幻・響の如しと覺了すれども、諸々の妙願を満足して必ず是の如きの刹を成せん」と、一切の法は夢の様なものである、幻の様なものである、たゞのひびき、響いたと思へば直に消えて行く、さういふ風なものであると覺り通してゐるけれども、それを覺り通してしかも諸の妙なる願を満足して必ずその淨土を建立すると云ふ事になるのが仏の境界である、この夢・幻・響とかうならべてありますが、私共の心全体としては夢、私共の目にうつるものとしては幻、それから耳に聞えるものとしては唯の響と、かういふ意味の違ひがあるものでありませう。だから我々の心に考へる事を皆夢であり、目にどんなものを見ても皆幻であり、耳にどういふものを聞いてゐてもそれはやがて消え行く響であると、どれもその根底の無いものであつて、我々の執着すべきものは一つもないと云ふ事を覺り通して、それぢや一切は夢・幻・響であつてそんな事であれば我々は願ひも何もないと無茶苦茶の事になるか。さうぢやない。さういふ夢・幻・響であると云ふ事を覺り通して居ながらそこに妙なる願を起してそれを満足して行く、そして必ず淨土を建立する、それが仏の心持ちであると。つまり私共はどう云ふ風になり勝ちかと申しますと、何時も申します理想主義になるかと思ふと自然主義になると云ふ様な事であつて、私なんか殊にさうでありました。非常な理想主義を持つてゐた、そ

それが近角先生の信仰上のお話からその理想主義が崩れてしまつた。そして親鸞聖人の道の第一歩、そこははつきりして居つたわけでありすが、それぢやあとの私がどうなつたかと申しますとなか／＼こゝに説かれる様にはなりませんで、今度は前が理想主義であつたゞけに今度は自然主義であるかの様な生活に私なつて来たのであります。だから一寸余談になりますけれども、サア近角先生がおかくれになるほんの数年前の事でありましたでせう、私が人の事を引き合ひに出すのは悪い事でありませうけれども、あの御存じでありませうが白井さん、白井さんと私は非常に合ふ所があるかと思へば一寸も合はない所がある、それで近角先生に行つて苦情を云うたのであります。どうも白井さんに出会ふと非常に合うたり合はなかつたりと申しましたら、「ドツチもドツチだ、もし白井君が理想主義なら君は自然主義である」とうんと先生から云はれたのであります。その時の私は五十を越えて居たらうと思ふのであります、そんなものでありましてどうも始め理想主義であつただけに今度は自然主義になる。もつとも私は自然主義だとは思つてゐませんけれどもさう云ふ姿になつてゐるのであります。でありますから仏の境界と云ふものは理想主義で無く、自然主義でなく、夢・幻・響と覺り通してゐるけれども、然も諸々の妙願と云ふものをそこに持つてそれを満足する、これが本当てありませうか。何か源信僧都の伝説に

あつた話でありますけれども、源信僧都が子供の時、坊さんが川で汚れた手を洗つて居る、まだ子供であつた、後の源信僧都が仏教には淨穢不二と云ふから汚れた手も清い手も同じだから洗はんでもいゝぢやないかと云ふ事を云つてやり込めた、それはほんの青年期になりかけのまだ生意氣な時の事でありませう。淨穢不二ならば洗はんでもいゝぢやないか、淨穢不二と云ふ事が徹底的にわかつて汚れた手を洗ふと云ふのが仏法だと聞かされて居ります。その処であります。その後を全部ひつくとつて「法は電影の如しと知れども」、稲妻の影の様なものだ、法としてこれが道である、これがみ法だと云つて何かつかまへたやうにして執着するものが出来たら、それは本當でない、やつぱり法と云つても稲妻の影の如き事を知る、それぢやそんな事ならば道を求めるといふ事はしないといふことになるのかと云ふとさうぢやなくて、稲妻の様なものを知つて併しなから菩薩達の道を究竟すると。菩薩の道を徹底するまで行く。そして「諸々の功德の本を具し投決して當に作仏すべし」であります。この功德の本といふのはやつぱりお念仏の事でありませう。つまり菩薩の道を徹底する迄行つてそしてお念仏を我が身に生きて具へてであります。結局必ず仏の境地迄行くといふ事になる。その次も同じ様な事、諸法の法は一切空である、無我であると云ふ事に通じて覺り通す。それならば淨土も何も無いかと云ふとさうでなく、そこを覺り通して然も専ら清らかな仏の国を求めて必ず淨土を建立すると云ふ行まで行く。仏の境地といふものはつまりかういふものであるといふ事を阿弥陀仏が仰せられるといふ事になるのであります。未 完

## 求 道 い ろ ろ は 歌

西 村 武 三

い 生けるうち衣食の用意せにやならぬ後生の用意なほのことなり  
ろ 炉辺に寄り、友と御法を語らへばあだたまりゆく身もこころも  
は 恥しき悪ばかりなる思出にわれは泣きたり愚かなりしと  
に 煮へかへるわが胸の内閉ざされてしてあやうなく沈みゆくのみ  
ほ ほの／＼とただ念仏のきこえけり夜空の明るるそれの如くに  
へ 部屋のなか仏語一ぱい貼りつめてうれしわたしは満たされてゆく  
と 十重二十重業繋の苦惱きびしけれされどうれしや繩尻は弥陀

ち 智慧もなく歩みもならぬ身にしあれど大願力で西へ運ばれ  
り 理もつきぬはからひもたへし無能もの不思議のみ手に生かされてゆく  
ぬ 盗人の置き忘れたる窓の月アナありがたの南無阿弥陀  
る 類のなき南無阿弥陀仏の尊さは金がなくてもいのちな  
くても  
を 老坂にうらぶれ果てし身にしあれど本願思ひ力覺ゆる  
わ 我が住家南無阿弥陀仏の蔭の上返りの宿では落ち付け  
もせじ  
か 可哀さう見捨てられぬの親心きこえて安心南無阿弥陀  
仏  
よ よきことと思ひせしことみな／＼が虚仮ばかりなり悪

ばかりなりし  
ただひとつ弥陀のたまもの南無阿弥陀仏仰ぎ頂くばかりなりけり  
歴代の高僧智識の御実言 超断のみ声 引接のみ手  
そのままと喚ぼうみ親は涙声きくわれも亦涙なりけり  
つ つか／＼と過ぎにしとしを思ふれば一生造悪親泣かせのみ  
ね 願はるる身なりとしらで願ひにし愚かなる我今ぞはづかし  
な 何とかしてどうにかしてが御名となるただ南無阿弥陀  
ら 仏々々々々々  
す 榮々の道と勝手にきめ込みて親の苦勞を思うてもみ  
む むつかしき思慮分別は要らざりきただ南無阿弥陀仏きくばかりなり  
う 憂きことの多きにつけて思ふわれ弥陀が涙は如何ばかりなむ  
る 右よりもかたき我情のこの性根 無懺無愧にて今日も果てぬる  
の のどらかに子等と遊びし良寛坊ちかひのみ手にまかせ終りて  
く 苦しみのどれもこれもが身から出た錆と気がつき恨み

どこなし  
や 矢も楯もたまらぬ悔に独り泣くこのひとりこそ弥陀は待ちける  
ま まめなのも金の有るのも親も子も頼みにならぬことと知らず  
け け 今日も亦忘れ勝なりお念仏親は忘るるいとまもなきにふと浮ぶ御名こそ唯のたのみなり浮木の譬われは身にしみ  
こ 子の故にみ親の涙かはかじと聞けど泣かざる我は鬼子よ  
え えらいこと三世の業を横薙ぎに截ち切りたまふ不可思議のみわざ  
て 照らされてわが脚下の映ゆる時あな恥かしや驕慢のわれ  
あ 悪業の限りのがれは出来ざりき弥陀のみ慈悲はその故にこそ  
さ 咲く花も人世の花も夢のうち永劫に咲く花分陀利華尊し  
き 聞けや聞け聞いてくれよの弥陀の声骨身に滲まぬしぶとき我は  
ゆ ゆくてより親は喚びつめ招きつめわれは迷ひに明け暮れるのみ  
み み 仏の涙のかわくひまぞなきわが苦しみと悩みの限り

し し み／＼とお慈悲思ふはいと少な今日も煩惱に酔ひて果てぬる  
ひ 広々と無碍の一道展げゆく碍りあるまゝ障りとかさねも 諸々の苦惱に行く手ふさがるもただみ名のみぞ道をあけゆく  
せ せ わ／＼と此の世の事に明け暮れて後生急がず墮ちゆくわれは  
す 寸前も知らぬこの身にありながら明日も明けゆくものと思ひて  
京 け ふもまた法の真清水つきせぬを濁世に汲みていともたのもし

後記

西村武三君に寄す

昭和三十一年春日 寺島 白耀

君は青春の頃他力本願の熱心な求道者であつた。其後僕は京都に在住していたので、何時であつたか判らないが、君は東京に走つて江間式心身鍛錬道場に入った。お互に滋賀県に帰省すれば必ず訪ね合つて消息は大体判つてゐたが、君が白双の上に毅然として立つた姿、一喝に人を倒す気合術の様な妙技を見せられて、時当若い僕等の血を躍らせたものだつた。自力修行と云ふものであらうか？

十年近く君は居つたと思ふが、突如去つて台湾の新高山に現はれた、凡てを割切つて終ふと云う爆弾的な大決意であつたやうだ。  
然し台湾からの帰途ほとんど放心したように飄然と僕を訪ねてくれたのが、いつの年かの歳末の頃であつた。四五日共に起伏して語り合つたが以前の君ではなかつた。さびしい中に一縷の微光を趁つているやうにも感じられた。とに角、大きな心境変化であつたやうだ。  
其後、天理教神学校を出た。君の行動の一切は神の命するままとして神前に平伏す敬虔な姿は僕のなほ新しい記憶である。  
今日他力本願に還つてきて法悦に浸つた歓喜の朝夕を過す現在と、実にさまざまの君の表情に接して来たが、いつでも相寄つて懐しく語り合へる友である。これが親友と云うものだらう。  
いい加減なところで自己をごまかさないうで、真剣に迷ひに迷つて一生を賭して来た。最後に『オ、コレダノ』と廻り着いた他力本願の体感のよろこびはどんなであつたらうか、友人のために実に喜びに堪へない。  
こないだの君の偶作、求道いろは歌を詠んでるうちに、自分と云ふ臭味なく、童顔の君と対談してるやうに感じられて、なつかしく無断で彦根市平田町の中島君に無理をいうて孔版にしてもらつた。其意を諒し咎むる勿れ。



編集後記

梅雨も去り、デリ／＼と照りつける真夏のひかりに、海を恋ひ、山が慕はれる頃となりました。

やがて七月から八月にかけて盆踊りの太鼓と歌声がしばらく続き、亡き人々を想ふことでありませう。

神通力を得た目蓮尊者は、亡き母を慕つてその姿を求める。すると飢渴のため骨と皮ばかりになつて餓鬼の境界に落ちて苦悶する母を見出す。すぐさま、飲み物と食物を持つて目蓮は母のもとに走り寄る。然しすでに餓鬼道に沈む身の悲しさは、水は火と燃え、食物は火塊となる。母は目蓮が捧げれば捧げる程、層一層に苦悩し悲泣するばかりで、微塵もどうすることも出来ない。そこで目蓮も亦大苦悶におちて、仏陀の前に走せ、亡き母を救ふべき道をたづねるのであります。

仏は目蓮を憐み給うて「汝の孝心、天地の鬼神を泣かしめるとも、鬼神や天人の力をもつてしては、亡き母を救ふことは出来ない。道は一つ。七月十五日の安居の日に、十方の衆僧を供養

し、その加威力を仰げ」と教へられるのであります。

目蓮はそこで、能ふ限りの大供養をし、衆僧を拜すると、不思議や懸倒の苦にあつた母が、餓鬼道を脱して目蓮のもとに帰り、母と子とは無限のよこびの中、踊り上つて随喜するのであります。

この経は、浮調子の生活を続けている私共の心を、久遠の御親の前にひざまづかし、そのみ心に触れさせられるものがあります。

神通力とは不思議な通力、即ち仏の智慧であり力であります。それが得られると、始めて親の苦勞というものが見え始めて来るのであります。

然しそれは無我の智であり、おれが、おれ一人で、といふ世界ではなく、天地に満つる御恵みの力以外には、それを解決して下さるものはない。そこにおのれを空しうして衆僧を供養するといふ道が存するばかりであります。

元來母親が子供可愛さの余りに、物に執着し、食物を惜しむので、餓鬼道におとしたのは子供であります。その子供が母を苦海に沈めながら、それをそれと知らずに過した、そこに仏智がひらけて、天と地に懺悔するといふところに、真実の盆踊りの意味もあるのであります。

あります。

西村武三さんは滋賀県愛知郡稲枝町甲崎に生まれ、農業にいそしんで居られます。近角先生に師事せられた、能登川の弘誓寺、故那須一乘師の教を苦悶の最中に想ひ浮べられ、早速、弘誓寺様を訪はれましたが、すでに故人となられて居り、發願寺の御老母様と、善照寺の奥様と三人で雪の降る日お来庵下されたのが、私との御縁の始まりであり、西村さんの念仏に転入せられた頃でありました。

定価	一部	十七四 (送共)
	半年	百四 (送共)
	一年	二百四 (送共)
編輯・発行人	花田 正夫	
名古屋市千種区千種町馬走二八		
印刷人	奥川 正生	
名古屋市南区駄上町二ノ二八		
發行所	慈光社	
振替口座名古屋	一〇四七〇番	